

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 59 号

平成 19 年 3 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

神谷美恵子著作集 第 2 巻「人間を見つめて」より (5)

らいとの出会い (抄)

「あなたは将来、何をもって社会のためにつくしたいと思いますか」...

たずねた人は星野あい子先生(津田塾塾長。当時神谷先生は塾の2年生)。

...

「さあ。先生にでもなりましょうか。」困ってこんなでまかせの返事をしてしまった。...

そんなときであった。亡母の弟にあたる故金沢常雄(内村鑑三の弟子、小西芳之助先生の友人)から東京都にあるらい療養所多摩全生園へ、一緒に行かないか、とのさそいを受けた。...全生園の患者さんのキリスト教の集まりで話をしてくれ、と叔父がたのまれ、その集會にオルガン弾きの格でついて行ったのであったと思う。

らいという病気について何も知らなかった者にとって、患者さんたちの姿は大きなショックであった。自分と同じ世に生を享けてこのような病におそわれなくてはならない人々があるとは。...

看護婦か医者になれたら。そしてらいのために働けたら。...

翌年、津田を卒業する前から東京女子医専の規則書を取り寄せて、ひそかに受験準備を始めた。これがわかると、当然、両親や星野先生から猛烈に反対された。...賛成して下さったのは三谷隆正先生だ

けであったろうか。

ところが、その後間もなく、結核にかかっていることが発見された。万事休す。家族への感染の問題を考え、一人で山（軽井沢）へ行くことを願い出て、療養生活を送った。…2階にじっとねたまま、本台にぶらさげた書を読む日々の心境にはまさに「死への準備」のような面があった。…それほど極度に孤独であったが、ふしぎに充実した日々であった。この時にめぐりあった本たちは心の奥底にしみ透おり、その後の一生を支えてくれたように思う。…多くの療友が死んで行った時代に、私はふしぎにも少しずつ治って行った。…

星野先生はきっとまた教師になる気になったのだと思われたのだろう。是非アメリカに留学せよ、と言っているいろいろ便宜をはかってくださった。何という寛大な恩師であったことだろう。…

渡米後、コロンビア大学の大学院でギリシャ文学科にいれてもらい、1年近くの間、ギリシャ語ばかり読んで暮らした。アメリカでギリシャ語をやる学生は極めて少なく、小さなグループの中で白髪の学者から静かな講義をきいているとき、そこがニューヨークであることを忘れるほど、はるかなるものに沈潜することができて、この上なくたのしかった。

ちょうどこんなふうに（医学への志願について）迷っているとき、フィラデルフィア郊外にあるクェーカー経営のペンドル・ヒルという寮で、全く偶然にも、浦口真左さんという未知の日本女性と一緒に数ヶ月暮らす、ということが起こった。女高師理科の出身で、年齢は私と1日しかちがわない。

夜9時以降なら日本語をしゃべってよい、と言われていたので、私たちは毎日その時間を待ちかねて、アメリカ文明についての感想や将来計画について話し合った。当然、私の医学に関する「かなわなかった夢」が出てくる。

「どうしてかなわないと決めちゃうの。人間、自分がぜひやるべきだ、と思うことはやるべきよ」と真佐さんは主張する。

彼女は現在に至るまで私の親友である…。彼女は私の恩人である。

彼女にたきつけられて、私の夢はまた燃え上がった。父との軋轢（あつれき）、津田への不義理　すべてまたくりかえし。

父（前田多門）の反対は、ふとしたことから思いがけなくも積極的指示に変わった。「ただし、一生医学をやるんだぞ」と言ったが、決してらの仕事に向かうことを認めてくれたわけではない。医学をやっているうちに気が変わるだろうと思っていたにちがいない。

光田健輔の横顔

光田健輔先生は日本のらい事業の開拓者として、すでにあまりにも有名な方である。忠実な弟子でも何でもなかった私のようなものが、今さら何を書いてみても蛇足のような気がする。...

次に記すのは昭和18年夏、私が初めて先生にお目にかかった時のことで、そのさいつけた日記から当時の先生の一断面を取り出してみよう。この時の先生の印象がかくも強烈でなかったなら、私は昭和31年以来、ふたたびらいに関係することはなかったかも知れない。それを思うと、一生を導く目に見えぬ糸の結び目のようなものの一つが、この光田先生との出会いであったように見えてくる。

そのころ私は(東京女子医専の)医学生で、翌年の卒業をひかえ、将来の進路を決める必要にせまられていた。出来ればらいの分野で働きたいという志望を抱いていたが、家の者の反対は根づよかった。

ともかくらいの仕事はどんなものか、それを知りたいと思い、長島愛生園に願い出て、昭和18年、夏休みの8月15日から12日間を、瀬戸内海の島に滞在させて頂いたのである。診療、手術、解剖、研究 毎日が充実した見学と実習の日々であった。

8月8日(日)

(光田先生の言葉)

「人はみな小さなことばかり考えとるからいかん。生活がどうの、身内のものがどうの、などと自分のことばかりな。それよりか日本全体のこと、東洋全体のことを考えなくちゃいかん」

「ドイツ語もフランス語も、自由にできなくちゃ話しにならんよ」

「らいは(皮膚科かというような)そんな小さな料見だから困る。らいをやるには、あらゆる方面から行かなくてはならない。何でも知っていなくてはならない。皮膚科なんていっているから、ちっともこの方面の研究が進まないのだ」

「だいたい日本人は今まで借りものばかりしていたからいけない。外国の学者に頼っていたからいけない。外国の学者に頼ってはいけ

ない。何でも新しく創り出して行かなくてはいけない。」

世界的に有名な光田先生は学者としての功績も輝かしいのに、今まで何度学位授与の話をされても断ったという話を、あとで他の人からきいた。先生の若々しい情熱、広い視野、洒脱な風格に、私たちはすっかり魅了されてしまった。これが68歳の方と思えようか。

8月14日(土)

「でも結局、こういうところへ来るということだってあたりまえのことだと思っただけですけれど。人出が足らず、やりたいと思う人が少ないからやる、というまでで…」私は、園に来てから、いろいろな先生にむかって言ったことを、また馬鹿の一つおぼえみたいにくりかえした。

「いや、あたりまえでもないですよ。やっぱりこういうことをするには捨身にならなきゃいかんからな」

「なんだってやろうと思えばできますよ。心がけ一つだ。やろうと思わないのがいけないのだ」

これは研究についてのお言葉だった。先生は医学の基礎的研究に対して恐ろしいほど烈しい、若々しい情熱を持っておられる。それは診察する時も、解剖の際も、ふつうの談話のときでも、たえず疑問をおこし、たえず考え、たえず人にただすのをみてもわかる。そして大学の先生が何でも助手にさせるのを非難し、ささいな統計でも自ら手を下して行われる。

朝の静かな試験室でポツリポツリと先生とお話していると、なんだかお祖父様とお話しているような気がしてくる。専門の学問においても、人間的にも、心から尊敬できるこの先生を、もし師と仰ぐことができたらどんなに幸せだろう。この二重の意味で尊敬できる人であったのは生まれて初めてだ。

(以上昭和18年8月の日記から)

(注) 光田健輔(1876 - 1964)

山口県防府市生れ。濟世学舎卒業医術開業試験に合格。東京帝大医科大学専科(病理

特科)を卒業。東京市養育院、全生病院に勤務。1931年から1957年まで岡山県にある国立長島愛生園園長をつとめる。1951年文化勲章受賞、防府市、岡山市名誉市民。ハンセン病患者の救済事業に取り組んだパイオニア。最近では、ハンセン病患者の隔離政策を助長した人物として、元患者などで批判する人もいるという。

島日記から

1956年6月1日 うっかりしたら生命にかかわるような病気（初期の子宮ガン）に昨秋からかかっていたが、どうやら今日のT病院受診の結果ではラジウム照射で食いとめられたらしい。

こんどこそ学位論文のテーマをきめて書きあげなくては。何しろ余命がわからないのだからこれ以上ぐずぐずしてられない。愛生園で精神医学的調査をしたい、ということは前にも言っていたことだったが、今日はN（宣郎）のほうから、ぜひそうせよ、とすすめてくれた！

1956年10月5日 （大阪大学の金子先生が）愛生園で調査することに賛成してくださったので一安心。うれしくて夜中に目をさまし、一人感激。内職と育児に明け暮れた十年の果てに、ようやくお許しができるのか。これからも体を、そして家庭をも大切にしようと思う。

1967年4月16日 今日、（島から）夜8時帰宅。子どもたちのよるこびよう。一家だんらんのありがたさ。患者さんたちに申し訳ないようだ。

1967年9月19日 M（美恵子）よ、お前に求められていることを逃げてはならない。妻としてのつとめ、母としてのつとめ、主婦としてのつとめ、そしておまえ自身へのつとめ そのどれもおろそかにしてはならぬ。しかもその上、永遠の相のもとに時を観ずること。

1959年10月29日 父を長島へ案内する。夕方6時から講演会。約200名の患者さんと50名ぐらいの職員が集まった。話は、国内政治・選挙・ユネスコ・国際平和など父の半生のレポーター。

1959年10月30日 午前9時、高校で父の話。…岡山への途中、病臥中の光田先生をおみまいする。昔、娘が愛生園に就職したいと言ったのを反対してすみません、と父は言った。思えばふしぎなことばかり。岡山では私の生まれた後楽園の官舎の跡を教えてもらった。今は旅館になっている。

1960年7月23日 5時半に起床。波の音。今日はN（宣郎）の誕生日。後で祝電を打とう。私を見送ってまで、こんなところによこし

てくれる愛と理解のふかさは何と感謝したらいいか。

1960年9月17日 ゆうべは子どものことでひとさわぎあり、夜1時ごろまで起きていた。けさ皆の眠る家を一步出れば、真暗な空にダイヤモンドのような星がきらめき、悩みの現世から一挙に別の世界におどり出た感じがした。わが子を守り給え、と祈りつつ、電車に乗り、汽車にのり、日生まで居ねむりをつづける。森丸に乗ると、静かな湖のような水面に島々の緑が映ってすべって行く。

1962年3月20日

まっくらな道には
もう春のやわらかい風が流れている。
その流れに乗って
べつの世界にすべり出る。
だれもない駅に
ひとり腰かけて光をあび
闇を見すえている者。
それは女でもなく男でもない。
主婦でも教師でも医師でもない。
ただの人間、ただの求道者
たえず別の世界にすべり出て
人間を、人生を、世界を
もう一度見つめ直そうとする
一個の人間にすぎないのだ。

1962年6月4日 父上6月4日11時37分に逝去。私は1時間おくれて羽田着。

1964年5月26日 光田先生ついに昇天され、昨日岡山でお葬式。今日は園葬。患者さんたちと万霊山まで歩いて納骨式にも出る。感慨胸にあふれる。

1964年9月23日 津田をやめて愛生園に任官する話が園長との間にきまる。ただし、月2回だけ来てちゃんとサラリーを貰うことは心にひっかかる。...ともかく津田にいるとぬきさしならなくそう

で怖いから辞めよう。N（宣郎）も津田の話が昨秋あったとき、私が島へ行けなくなると生き甲斐がなくなるのではないかと心配したそう。

経済問題の不安も乗り越えるべきだ。十年ちかく前、ガンを宣告されたとき果すべきことを果さないで逝くことに対して流した涙をもう流したくない。

1965年3月12日 島からのかえり発熱し、ずっと寝ていた。私のからだも神経も弱い。また家事や家族のことでたえず時間が中断される。その上島へ行くとは。

しかし島行きは私の実践として、自分の思想を生きる場所として、ぜひとも必要なのだ。あそこで通用しうる思想しかほんものではない、というのが私の迷信なのだ。あそこで生まれ、あそこで生きられた思想（？）を書くこと、それが私のなすべきことではないか。

1966年7月15日 激しい腰痛。自分の体力が不足してきていること。留守を守ってもらうおばさんの老い、子どもたちの進学などで、つとめを続けることがだんだん無理になってきて悩む。結局1967年7月限りで専任をやめさせていただく。これによって一番体にこたえた当直を免れ、いろいろな無理も除かれた。しかし、1年と数ヶ月の専任経験は島に住みこんで働く医官や看護婦さんの苦勞を少しでも理解するのに役立った。

1969年1月16 - 18日 いつもの外来、往診、病棟めぐりの仕事の途中、ひどい疲労をおぼえ、目がかすんで困った。ここ数年こうなのだ。仕事を終えて大勢の看護婦さん、生活補導員さんたちにまじって大きなお風呂に入ると、冷え切ったからだに血がめぐって行きかえるようだ。

「人間を見つめて」あとがき

精神科医の立場は伝道者のそれとは違い、こちらの考えを説教するのではなく、相手の心の世界を知り、できればそれに通じる言葉を発見しようとするのが第1の任務である。とはいえ、自分の心がまえとして、らいの人にも健康者にも同じ人間として通用しうるような人生観を、と言うのが私のひそかな探求目標となった。私の見るところでは、宗教的な次元をぬきにしては苦悩の中にあっても人間が人間らしくありえないのではないかと思えるのだが、さりとして特定の宗教の形式にこだわる気にはなれない。むしろ、日本のようなところではみんなの心に眠るそぼくな宗教心の最大公約数のようなものをとり出して、自然科学をも包みこめるような現代的な世界観をきずきあげるほうが自然なのではなかろうか。

万霊山にて

瀬戸内海の島の一隅に小高い丘があり、こんもりした木立の中をゆっくりした山道が緩やかに巡っている。…丘の頂きには半球形の大きな石のドームがどっしりと座っている。…

ここへ来れば大きな卒塔婆がだまって、そこに立合っている。いわば死の背景のもとでの対話であり、冥想であるといえよう。生と死について考えるのに、これほどよいところがあるだろうか。このドームの中には三千人を超える人たちの遺骨が収められているのだ。…創立者光田健輔先生ももちろん例外ではなく、納骨式の日々の光景はいまだに目にあざやかに浮ぶ。島の人はこの丘を万霊山というが、この万霊山こそ長島愛生園の全体の背景であり、死こそ生全体の背景なのだと思う。少なくとも、私はここに来る時、いつも死の相のもとに生を眺め、死者の眼の前で生きていることを痛感せずにはいられない。…

考えてみれば、死後のことばかり思って生前、即ち人間が生れてくる前のことを思わないのはおかしい。私たちは生まれる前も大自然の中に諸元素として散らばっていたのだろう。それがたまたま諸条件の微妙な組みあわせによって一つの生命、一つの個体、一つの自我となってこの世に生れてきたのだ。いわば「永遠」または「無限」の次元からしばらくの間、歴史的時間の中に組みこまれたわけである。縁あって時と所を同じうして生まれあわせたものは、共に生き、共に苦しみ、共に何らかの歴史を形づくった後、ふたたび永遠の次元にかえって行くのだ。人生は「永遠」と「時間」の交差点であり、人間が歴史に参加できるのは、この点にも似た短い時間にすぎない。与えられたこの短い生をどのように生かすか、生かせるか。それを見なければこの卒塔婆の後ろの扉をあけて、たくさん並んでいる骨壺を眺めればよい。困難の中で堂々と使命に生きた人や苦悩の中で雄々しい生涯を行きぬいた人の名前が、そこにはいくつも記されている。

「ハリール・ジブラーンの詩」より（３）

苦しみについて

神谷美恵子訳

苦しみについてお話下さい、とある女が言った。

彼は答えた。

あなたの苦しみはあなたの心の中の

英知をとじこめている外皮（から）を破るもの。

果実の核（たね）が割れると中身が陽を浴びるように
あなたも苦しみを知らなくてはならない。

あなたの生命（いのち）に日々起きる奇跡

その奇跡のおどろきの心を抱きつづけられるならば

あなたの苦しみはよろこびと同じく

おどろくべきものに見えてくるだろう

そしてあなたの心のいろいろな季節をそのまま

受け入れられるだろう。ちょうど野の上に

過ぎゆく各季節を受け入れてきたように。

あなたの悲しみの冬の日々をも

静かな心で眺められることだろう。

あなたの苦しみの多くは自ら選んだもの。

あなたの内なる医師が

やめる自己を癒（いや）そうとしてのませる苦い薬。

だから医師を信頼して

黙ってしずかに薬をのみなさい。

医師の手がたとえ重く容赦なくとも

それは目に見えぬもののやさしい手に導かれている。

彼が与える杯があなたの唇を焼こうとも

それは大いなる焼物師が

自らの聖なる涙でしめらせた

その粘土でつくられたものなのだ。

(神谷美恵子先生の解説)

ジブラーンが痛み(ペイン)というとき、からだの痛みも心の痛みも含まれているのでしょう。彼自身、その双方を多く味わった人でおそらくその中から深い「英知」を身につけたのだと思います。自分の心の中の「いろいろな季節」をありのまま受け入れることを学んだのは大きな知恵だとは言えません。また「自ら選んだ痛み」のあることを知ったのも人の心への鋭い洞察だと思います。自分の内なる意志の存在に気づいた点も。